THE THERAPEUTIC EFFECTS OF SALICYLAMIDE UPON
NEURALGIA AND ARTHRODYNIA OF LEPROUS PATIENTS

OEI UMEKI

National Leprosarium Kikuchi-Keifuen
Department of Medicine, Faculty of Medicine, Kumamoto University.

36 leprous patients with neuralgia and arthrodynia were treated with orally administered Salicylamide.

The results are follows:

- 1) 20 of 36 patients are improved by this treatment.
- 2) The administration of 3 gm. daily is not enough. The required dosis is 6 to 8 gm. daily.
- 3) In 16 patients (44.4%) there are side-effects of this drug, mostly consisting of symptoms of stomach.

癩患者に於ける神経痛並に関節痛のサリチ
ル ア ミ ド 療 法

国立療養所菊池恵楓園 (園長 宮崎松記)

熊本大学医学部第一内科 (主任 勝木教授)

榎 木 旺 栄

(昭和28年4月16日受稿)

緒 言

癩患者には神経痛並に関節痛が甚だ高率に発症し甚だ頑固で患者を最も苦しめるものである。これに対する治療法としては従来種々の方法が試みられ夫々見るべき効果を挙げ得てはおるが未だ確実なるものはない。

最近サリチルアミドが緒種の神経痛及関節痛等に用いられる様になり、本剤は従来のサリチル酸剤よりも効果が大きく副作用が少ないと云われている。これについては山崎¹⁾、田坂²⁾等の報告がある。

そこで余は癩患者に於ける神経痛並に関節痛に対してサリチルアミドを使用してその効果を検索したので以下報告する。

症例及使用方法

患者は凡て菊池恵楓園入園患者にして観察期間は昭和26年11月より27年9月までである。症例は神経痛7名、結節痛29名計36名である。患者の訴えた疼痛部位は第2表の自発痛の項に示す如くである。

使用方法是吉富製サリアミンを最初は1日3g3回分服としたが効果が不充分であつたので、後には1日6g或は8gを3回或は4回に分服せしめた。

成 績

A) 鎮痛効果

これらの痛みに対する効果は痛みが全くか又は殆んど消失したものを有効、明らかに減少したものを稍有効、全く影響がないのを無効とすれば第1表の如くなる。

第1表 綜 合 成 績

例数	神経痛7名	結節痛29名	計 36名
効果			
有 効	5 (71.4%)	12 (41.4%)	17 (47.2%)
稍有効	1 (14.3%)	2 (6.9%)	3 (8.3%)
無 効	1 (14.3%)	13 (44.8%)	14 (38.9%)
不 明	0	2 (6.9%)	2 (5.6%)

即ち約半数に有効であつた。これを病型別に見ると神経痛におけるそれは結節痛におけるものよりも治癒しやすい様である。しかし結節痛29名の中10名のものは顕性結節性紅斑に合併したものであつて、それら10名中効果のあつたのは僅かに1名に過ぎず他は無効7名、不明名であつた。

次に癩患者に於ける神経痛は屢々多発性に來り然も関節痛をも併なうものが多いが、これ等を部位別に見ると第2表に示す如くである。

第2表 疼痛部位と諸効果

部 位	効 果	自発痛		圧 痛		神経肥厚		関節腫脹	
		軽減 及 消失		軽減 及 消失		減少		減少 及 消失	
上 肢	尺骨神経域	28	10	28	10	28	2		
	橈骨神経域	3	1	3	1	1	0		
	そ の 他	7	0	3	0				
下 肢	坐骨神経域	9	5	9	5				
	腓骨神経域	21	5	21	5	21	0		
	脛骨神経域	6	1	6	1	5	0		
後頭神経域		3	0	3	0				
三叉神経域		7	3	7	3	7	0		
肋間神経域		3	3	3	3				
腕 関 節		2	2	1	1				
肘 関 節		1	1						
膝 関 節		10	6	9	4			1	1
足 関 節		5	4	3	2			2	0
眼 部		3	1						
計		108	42	96	35	62	2	3	1
症 例 数		34	20	33	18	26	2	2	1

註： 効果不明の2名を除く

先づ自発痛に関しては肋間神経痛の3例は全例有効であつたが、他の部位のものでは有効無効が混在しており特に尺骨神経域、橈骨神経域、坐骨神経域及その枝の腓骨神経域、脛骨神経域等は無効の例が多い。以上を綜合すれば痛みを訴えた神経痛部位及関節部位合計108ヶ所中42ヶ所に自発痛の軽減又は消失を見たわけであり、症例で云えば有効、稍有効が20名であつた。

次に圧痛に関しては自発痛の経過に略平行しており、96ヶ所(33名)の中35ヶ所(18名)に圧痛の軽減又は消失を認めた。

B) その他の効果

神経肥厚は癩の特徴であるが、自発痛及圧痛の存する部位において神経肥厚を明らかに認め得た所の62ヶ所(26名)の中でその肥厚の減退を証明し得たのは2ヶ所(2名)に過ぎなかつた。

又関節の腫脹を認めたのは18ヶ所(9名)の中3ヶ所(2名)であり、その減少消失を証明し得たのは1ヶ所であつた。但し全例結節痛であつた。(以上第2表参照)

C) 使用量と効果

使用量と効果との関係を見るに、第3表に示す如く始めの5名に対しては1日量3g3回分服としたが、これらの中1名にのみ有効であつて3名は6gに増量して始めて有効となつた。

第3表 投与法別に見た効果

投与法	有 効	稍有効	無 効	不 明
3g : 5名	1	0	(3)	1
6g : 5名	3	0	2	0
8g : 26名	10	3	12	1

依つて次の5名に対しては1日量6g3回分服としたが有効は3名であつた。それで爾後の26名に対しては1日量8g4回分服とした。その結果は有効10名、稍有効3名であつた。即ち3gでは明らかに不充分であるが6gと8gとの間には著明な差は認められなかつた。次に投与全量は有効例では最小量24g、最大量153g、無効例では最小量32g、最大量104gであり、100g以上投与したのは有効例中4名、無効例中1名で他の大部分が100g以下の投与例であつた。

D) 再 発

有効例17名中11名は1ヶ月乃至10ヶ月の間に再発を起してゐないが、他の6名は夫夫再発した。再発例中4名に再投与して凡て前回同様有効であつたが、それらの中特に重症であつた2名はその後も再発を繰返し特に1名は顕性結節性紅斑をも伴ない遂に本剤に対して無効となつたのである。尙再発を見たのは凡て結節痛であつた。

E) 副作用

副作用発現率は36名中16名即ち44.4%であつてその内容は第表に示す通りである。

第4表 副作用

種	類	頻度
消化器系その他	胃部不快感	6
	食欲不振	5
	胃痛	4
	嘔気	3
	嘔吐	1
	下痢	1
その他	全身倦怠	3
	悪寒発熱	1
例数 16名 44.4%		

即ち副作用の大部分は胃障害であつた。しかしてこれ等の胃障害を呈した11名中5名は本剤投与前に既に胃症状を軽度乍ら有していたものが本剤投与により更に増悪したものである。そしてこれらの胃障害は制酸剤、鎮吐剤の投与により緩解したものもあるが、2名は胃障害が甚だしくてサリチルアミドの服薬中止を余儀なくされた、その他倦怠感に眠気、頭がぼんやりする等を伴つたものもある。発熱は結節癩の1名に見たが、最初の7日間位は服薬後1時間位で常に悪寒を伴つて37°乃至38°Cの発熱を来し、他に発熱の原因を認め得なかつたものである。

総括並に考按

サリチルアミドを癩患者に使用した報告を未だ見ないが、以上の様に余が試みた癩患者に於ける神経痛並に関節痛に対するサリチルアミドの効果は約半数に有効であつた。即ち本剤も亦従来種々試みられた治療法に比べてより以上の効果を挙げることは出来なかつた。この成績を非癩患者に於ける成績と比較すれば少々劣る様である。即ち多くの報告に見られる様に何れも著効若くは相当の成績を挙げている。かかる相違を見たのは癩患者の神経痛はすべて症候性であり、その神経は特有の癩性の器質的変化を来しており特に急性増悪期には更にその病像は甚だしくなり頑固な痛みとして現われ、他の原因によるものとは比すべくもなく頑固であるからであろう。

余の例においても疼痛部位の神経肥厚を認め得ず真の癩性神経痛と断定し得なかつた肋間神経痛例には全例有効であつたのに反し、神経肥厚を認め得た他の部位の神経痛には無効の例が多かつた。

病型差としては神経癩よりも結節癩の方が効果は劣る様であり、更に結節癩の中でも癩性結節性紅斑に合併したものは特に頑固であることは日頃経験する所であるが、余の例の中10名がそれでその大部分が無効であつたことは此の間の事情を物語るものであろう。

使用量に関しては一般に1日3gにては不充分で6g或は8gを3回或は4回以上に分服させるが良いと云われておるが、余の実験の結果も略同様であつた。

副作用は非癩患者の成績に比べてその発現度が大きい様であつて、殊に胃障害が相当の数に上つているが、元来癩患者は神経痛或は関節痛その他眼痛等の痛みを訴える者が多く且屢々再発して、種々のサリチル酸剤を内服する事が頻繁であり、そのため胃障害を呈するもの或は胃が過敏状態にあるものが多い。又一方癩性結節性紅斑は同時に胃障害を伴ふことが多いのである。これらのために本剤の内服に際しても胃障害がかくの如く多かつたものと思考される。

しかしてサリチル酸剤の作用機転として、コチゾン様作用、或はACTH作用があるとの報告があり³⁾、又一方Roche等⁴⁾によれば癩性結節性紅斑及これに附随する各種の疼痛に対してACTHは著効をおさめたとの報告もあるので、サリチルアミドの更に大量長期療法を可能ならしめたならばより以上の効果が期待される。

結 語

1) 神経痛並に関節痛を訴えた癩患者36名にサリチルアミドを投与してその半数に効果を認めた。

2) 使用量は1日3gでは不充分であり6g乃至8gを要する。

3) 副作用は44%に認められ胃障害が大部分であつた。

(終に御指導、御校閲を賜つた勝木教授、宮崎園長、志賀医務課長に深謝す。)

文 献

- 1) 山崎晴一郎: 福岡医学雑誌, 43 (5), 昭27
- 2) 田坂 定孝: 最新医学, 7 (1), 昭27
- 3) Pelloja: Lancet, 1 (5), 1952
- 4) Roche et al.: Int. J. Leprosy, 19 (2), 1951